

Title	図書室はうったえる〔現状報告〕またれる新書庫移転 - 農学部図書室
Author(s)	
Citation	静脩 (1971), 7(6): 3-3
Issue Date	1971-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/36637
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

図書室はうつたえる〔現状報告〕

○研究室が書庫化——人文科学研究所図書室

270,000冊の蔵書は現在人文研本館、同分館、東洋学文献センター、附属図書館旧書庫、教官研究室、共同研究室の6カ所に分散所蔵されている。一昨年、プレハブではあるが書庫を増築し、スタック・ランナー（手動式集密書架）を入れたが、所詮焼石に水であり、毎年、夏休みにはアルバイト君とともに増加した図書のやりくりで汗水を流している。所内教官からの返却はできる限り控えていただき、また、退官教官の借用図書は可能な限り、新任者にひきつぐといった変則な状態がつづいている。教官の私的ライブラリー化へ、私達図書館員が意に反して加担せねばならないという、なさけない現状下におかれている。

○書庫＝収蔵庫か——教育学部図書室

すではみ出している図書は蔵書数の26.3%、さらに年間平均3,500冊で増加する図書をどこに置かかは図書室の最大の問題である。学部としては非常の手段として附属図書館旧書庫の一部を借用したが、これとても一時の急場をしのご程度で、先の予定は立てられないでいる。図書の利用があってはじめて図書の生命があるとすれば、このような分散、はては床に横積みする時、利用は著しく限定され単なる収蔵にすぎず、図書としての価値はなくなってしまう。

○ハシゴで図書の出納——教養部図書室

書庫の中は照明があっても暗く、昼でも懐中電灯を片手にしなければ図書の検索ができず、書架も9段・10段の高さになっているので、上段の図書はハシゴを利用しなければ取り出すことができず、能率的な作業はできない。書庫の面積がせまいから、書架間の間隔もせまく、図書を窓際に横積みしたり、書架のてっぺんに並べたり、書架の排列された図書の上にも何冊も積み重ねたり、あらゆる空間を利用して置き、全く足のふみ場もないくらいである。

このような現状だから、利用者から図書を請求されたとき、見当らない場合も多く、少なからず不快な気持を抱かせていることと思う。

○書架の間は横あるき——文学部図書室

文学部では1年間に約1万冊ずつ図書が増加し、現在蔵書は約52万冊に達している。全書架の棚の長さをただ機械的に合計して出している毎年の書庫収容能力の調査では、あと何年も書庫がパンクしないような印象があたえられるが、実状はそうではない。書庫設立時よりの固定式書架だけでは図書を収納できなくなると、通路に自立式スチール書架を置きだす。それが今では人の通れるだけを残して林立している。そのために、図書をかかえて歩く職員は、まっすぐに歩くことができず、時にはしゃがむことも、ひっかえすこともできなくなってしまう。

いつの日か、新しく書庫を作る時には、10年はおろか、50年、100年先の蔵書を考えて設計してほしいものと毎日痛切に感じている。

○廊下まで書庫に——工学部建築学教室図書室

蔵書数4万冊余にたいし、収容能力は3万冊余、この差約1万冊。このうち8千冊を各教官室に、1千冊を附属図書館旧書庫に分置している。しかしそれでもなお、廊下にも書架をたてならべた当図書室の、その書架の棚には、分類排架であるのに、もうそれぞれの分類の境のところには空間がない。わずかでもすき間があれば図書を横積みにしてしまっている。このような現状だから、雑誌をのぞいて新着図書のほとんどは、各教官室行きである。

○またれる新書庫移転——農学部図書室

農学部の蔵書約22万冊は、本学部旧書庫に10万冊、同新書庫に5万冊を収納し、あとは必要に応じて、各学科図書室・研究室に配置している。最近の年間増加冊数は約8,000冊であり、これらはすでに飽和状態となっているが、47年度に予定されている新書庫（収容能力20万冊。40万冊収容まで増築可能）への全面的移転によって解消できるものと思う。